色葉字類抄畳字門の漢語とその用字

——その二　訓読の語——

山田俊雄

先に、筆者は、字類抄畳字門の漢語のうち、字音語について、小稿の一部を公表したが、今回は、各部の畳字門の、末尾に一括されてある、訓読の語について、用字を数へ上げると同時に、正統の漢語とみるべきものと、しからざるものとを識列して、その訓読語の性格にも言及して行く序とする。

すでに、この訓読語について、十年の昔、本誌第三号で論じたことであつて、その時の趣旨では、訓読語は、それの字音語としての採録のあるものがかなりの数に上ること、及びそれらの中には、いはゆる文選読みの語が三分の一ほどあること、したがつて、日常の用語といつても、その日常性といふのは、極めて高度の書記言語的行為における日常性といふべきであつて、日常書簡用語といふ語で指すにしても、漢文訓読的世界の裏うちがあるといふ点で単純に日常的といふには遠いものであるといふ結論を述べたのであつた。

右の論では、実は、未熟な点がある。それは、日常性といふにしても、書簡用語といふにしても、十分な実証を以て立論せず、やゝ漫然と普通の用語だといふ先人の説への慊焉の情を述べたにとゞまつた憾がある。文選読みの語の多いことや、音訓両読の語の多いことについては、そのデータは今日でもほゞ正しいものを報告したのであるが、その処理については、本稿において、多少再考するところがある。

字類抄は、畳字門において、訓読の語を末尾に一括してのせてゐるが、いはゆる三巻本の当初にすでにその位置にあつたものと解すると、その字類抄編者の考へたところの畳字といふのは、一体どんな意味だつたのであらうか。

字音語として他に再出するものについては、その音読といふ点から、先づ漢語といふ現代の我々のもつ観念に近いもの

があつたことを推定して差支へないものと思はれるが、これも厳格にいへば、一語一語詳しい考証を要する。前稿（第三十四号所収の分）でも、その考証を省いてあるから、他の字音語についての論も、むろん改めて行はなければならない理である。その、当然行ふべきことを省略したのは、遁辞にならぬ一つの理由があつた。それは、字類抄では、どれだけの字音語があり、どれだけの用字の種類があり、そして字音があるかを知るのが第一の目標であつたからである。そして、その時代の人が何を字音と考へたかを知らうとする段階であつたからである。また訓読語をも包括すべきだという論を述べたのは、字音語のみが、漢語であるという確証がないからであつた。漢語であるか、ないかの弁別は、結局は、シナ編述の先行書に実用例があるかないかによつて先づ目安を立てるべきことなのであつて、その方面のことは、訓読語をもあはせて、しかる後に改めて考察しようといふ下心があつたためである。

そこで、本稿も、同じ趣旨から、先づ機械的に、すべてを仮に、字類抄編者の部類通りに、畳字であると仮定して、用字面からの分析を試みる段階にとゞめておくことにする。将来、ひろく他の領域の文献にもわたる漢語の集大成が一応出来上つた時にこそ、十分な弁別を与へることが出来ようといふ心算である。

次の表にまとめたものは、色葉字類抄三巻本の、畳字門に収めるところの、訓読の語である。この表は、それらすべてを、仮に畳字もしくは長畳字と看做した場合の、用字の面を考察する資料であつて、二合の場合は、下位字を主として掲げ、上位字を従として括孤にくくつて添加した。下位字として当該の文字をふくむ語の訓読は、その所には一々掲げないで、上位字の側からのみ検しうるやうに省筆したのは、印刷上の繁を避けるのが目的であつて、他意はない。

表凡例

一、見出し字をその字音にしたがつて整理した。この場合の字音は、できる限り字音語に用ゐられた字音の中からえらんだ。二種にわたり二箇所に出した場合も若干はある。

二、「　」は、その訓を、前後の記事から推定・解釈して決定したもの。

＜　＞は、中巻（黒川本）における「私云」の注記を伴ふもの、またそれに准ずるもの。＜　＞につつんだものは六に示すように、（　）には再出しない。

三、見出し字に与へた。印は、畳字門の音読語の構成に参与していない字を示す。即ち、訓読語にのみ出現するもの。

四、見出し字の下に、それぞれ示した畳字の中で、上位字の場合に、△印を与へたものは、音読語として重出するもの。（畳字門以外に重ねて見えるものについてはここでは度外視する）

五、見出し字の下に示した畳字の中で、上位字の場合に、×

字を与へたものは、その文字連結が、観智院本名義抄の見出し、もしくは注の中に見えるもの（ただし、訓読の有無や、訓の一致、不一致をここでは度外視する）。

六、（　）に包んで示すのは、見出し字を、下位字としてふくむ畳字。その場合、その訓読は、その語を上位字によつて示す場合にのみ之を示し、この位置では省略に従ふ。

七、この表は、用字調査の結果をまとめることを主目的として編んだものであるが、字音を検索のたよりにして文字を求め、さらに熟合字の倭訓の例を得る、一種の漢和対照表の役目をも兼ねる。従来、この種の辞書の尠いことに不満を感じて、特に煩を冒して試みたもので読者もつて諒せられんことを願ふ。

【あ】

ア
阿　—堵（コヽハク）×　—容（オモネル）×△
婀　—娜（ナマメク）×△
嬖。　—娜（タヲヤカ）
アイ
愛　—藝（ナツカシ）（寵—）
鬚。　—鬣（クラシ）×　—黥（タイ）〈ホノカナリ〉　〈—黴（アイタイ）
（タナヒク）〉
アク
悪　—争（ナンソ）
握。　—蹣（チヽケシ）×
アン
暗　（惣—）

【い】

イ
以　—降（コノカタ）×△　—還〔コノカタ〕　—来〔コノカタ〕×△　—為（オモハク）×　（何—所—）
倚　—坐（タ□キル）
意　—見（ココロミル）△　（任—）
迤　—靡（ナヽメニ）（委—　逶—）
夷　—猶（ユラヲモフ）（ウラヲモフ）×
易　（容—）
頤。　（支—）
衣　（更—）
謂。　（所—）
敭。　（闇—）
噫。　（疑—）
イウ
偷　—閑〔アカラサマ〕×△
猶（ユ）　—豫（イウヨ）〔ウラヲモフ〕（夷—）
誘　—引（サソフ）△
悠　（猶—）
優　（俳—）
由　（何—　具—　自—　无—）
イク
育　（撫—）
イツ
一　—心（ネンコロナリ）×△　—二（ツマヒラカ也）×
逸　—掎（ナコヤカ）

イン

引 —唱（イサナフ）×（誘— 勾—）

慇 —懃（ネンコロナリ）×△

因 （何—）

隱 （駈—）

【う】

ウ

于。 —茲（ココニ）

右 （左—）

紆。 （盤—）

ウン

云。 —云（サヽヤク）×（ツヽヤク） —何（イカン）×（—云）

雲 （庫—）

【え】

エイ

裔 （容—）

エウ

滎。 （淵—）

秡。 —務（ワサワヒ）

窈 —窕（タヲヤカ也） —窕（ミヤヒカナリ）×△

遙 —点（トヲヨソ）×△

エキ

駅 （駱—）

エツ

謁 （名—）

エン

延 —佇（タチトヽマル）×△

偃 —臥（ノイフセリ）×△ —蹇（ホシマヽ）×

煙 —塵（ワサワヒ）（瘴—）

縁 —底（ナニヽヨチカ）（本—）

紲。 —冤（クシケオル）

奄。 —忽（タチマチ）

闇 —敭（シナフ）×

焉 （於— 何— 掲— 忽— 馥—）

捐 （唐—）

莚 （蔓—）

【お】

オ

於。 —焉（コヽニ）× —何（イトコニシテカ） —戲（アヽ）× —是（コヽニ）×

オウ

謳 —歌（ウルヒクラス）△

【か】

カ

可 —咲（オカシ・オカシケ）× —惜（アタラシ・アタラ）× —憎（アカラシ） —耐（アナニクヤ）

—中（タマサカ） —被分給（ワカチタマハルヘシ）乞詞 —徵力（カヒロク）× —怜（ウツクシケナリ）（不—勝）

何。 —以（ナニヲモテカ）× —因（ナニヽヨテカ）×

—焉（イツレ）× —況（イカニイハムヤ） —

遑（イツチカイヌル）× ―所〔イクハク〕 ―由（アナニクヤ） ―為（ナニシニ）（イカヽセム）×（云― 於― 幾― 如― 誰― 奈―）

佳 ―辰（ヨキトキ）△

加 ―之（シカノミナラス）× （交―）

仮 ―綵（ウタヽネ）× （服―）

荷 ―前（ノサキ）

讃。 ―哉（コヽロヨイカナヤ）

歌 （訶―）

下 （直―）

賈 （商―）

夏 （常―）

呀。 ―呻（ノミハク）×

雅 ―妙（ミヤヒカ） ＜もと「稚妙」とありしを訂す＞（閑―）

解 ―纜（トモツナヲトク）△

邂 ―逅（タマサカ）×△

哈。 ―嚏（クツ〳〵トイヌ クヽトイネタリ）×（たゞし、名義抄は「哈台」）

介 （紹―）

芥 （蕓―）

睚 ―眦（ニラム）〔メミハル〕×△

咳。 ―齟（カマフ）

苡 （沛―）

概 （大―）

硅 （玲―）

好 ―色（イロコノミ）△ ＜―孋〔タヲヤカ也〕＞

更 ―衣（コロモカヘ）△

狡。 ―会（ウチアワセコト）× （僄―）

行 （景― 膝―）

向 （不―）

杭 （狼―）

降 （以― 請―）

強 ―顔（オモカケ）（ツレナシ）× ＜―健〔タメラフ〕＞×

礭 （商―）

額。 （点―）

喝 （恐―）

甲 ―斐无（カヒナシ）

袷。 ―恰（コレモカレモ）×

羚。 ―硅（コヽロコハシ）

峇。 （岌―）

恰。 （袷―）

圖 （蘊―）

呷。 （喧―）

甘 ―従（ナニカハスル）× ―至（ウム）×

敢 ―死（ヒタフル）

寒 ―心（ムネヒヤカス）×△

閑 —雅〔ミヤヒカナリ〕 —都（ミヤヒカナリ）
（偷— 長— 等—）
間 —諜（ウカミス・ウカミ）× （少—）
蔼 —略（イサヽカナリ）△
堪 ＜—忍（タヘネムセム）（もと「湛—」とある
を訂す）＞（難— 勇—）
頇。
（顧—）
干 （若—）
看 （挙—）
漢 （半—）
含 —嬌（ハチシラフ）
幹 —了〔オサ〳〵シ〕△
岸 —品（シナヽヽ）
嵒。 —齬（キカフ）
領 —許（ウナツク）×
眼 （詰— 売— 白— 尉—）
顔 （強—）

器 —量〔イカメシ〕△
幾 —多（イクソハク・イクハクソ）× —何（イク
ハクソ）× —許〔イクハク〕（イクハクハカ
リ）× （所— 庶—）
跨。 —蹠〔ウチハヤシ〕×
既 —往（スキシカタ）×△
闕。 —闇（ウカヽヒミル）×
騎 —両（キラ〳〵シ）（怙—）
骑。 —殤（ナヽメニ）
姥。 —嬢（ミヤヒカニ）（正しくは「—嬢」か）
奇 （数—）
掎 （逸—）
譏 （微—）
肩 （贔—）
疑 —噫〔アヽ〕（嫌— 狐—）
轙。 —榜（ソナフ）
儀 （威—）
觧。 —鏐（マカル）
蠡。 —裔（ムラカレトフ）×
久 （良—）
弓 （賭—）
詰。 —眼（ナシル）
裔。 （蠡—）

【き】

其。 —奈〔イカン〕
起 —弱（テコフ）×
喜 —見（メツラシ）（鈔—）
気 —調（イキサシ）×

キフ
岌。—峇（ハタメク）　—業（キフケフ）（タカクサカシ）×
急　—速〔タチマチ〕△
給　—預（タマハリアツカル）（可被分—　班—
被及—哉）
及　（被—給哉）
向（キヤウ）　—後（ユクサキ・ユクスヘ）×△　—前〔ユクサキ〕　—上（ミアク）×　—来（サキヨリ）×△
竟　—夜（ヨモスカラ）×△
形　—迹（ウトマシ）〔ウトシ〕×
警　—策〔イマシム〕△
響。　—蒙（ホノカナリ）　—者〔ムカシ〕
驚　—破（サヽヤキ）（ソヽヤ）
況。　（何—）
競　（倨—）
強　（木—）
軽　（勿—）
馨　（尒—）
仰（ギヤウ）　（端—）
却（キヤク）　（排—）
譴。（ギヤク）　（暴—）
去（キヨ）　—来〔イツレ〕（イサ）×△　（帰—）
倨。　—競（ホコル）
虚　—言（ソラコト）△
挙　＜—看（マカゲサス）＞　—動（フルマヒ）〔アリサマ〕×　（出—）
踞　（蹲—）
許　（頷—　幾—　如—）
渠。　（軒—）
御　—息所（ミヤストコロ）
恭（キヨウ）　（足—）
矜　（縦—　氷—）
曲（キヨク）　（巻—　委—）
今（キン）　—来（イマヨリコノカタ）×△
禁　—固〔イマシム〕△
謹　—言（ツヽシンテマウス）△
懃　（慇—）
困。　（輪—）

【く】

ク
驅。　（跨—）
盱　—衝（マユアケヌ）×　（衝—）
踽。　（奎—）
具（グ）　—旨（ツフサナルムネ）　—趣（ツフサナルヲモムキ）　—由（ツフサナルヨシ）
褒（クワ）　—頭（ウヰカウフリス）
禍　—胎〔ワサワヒ〕
嵐。　—圍（メクリクタル）

誇 ―尚〔ホコル〕
華 （声―）
臥 （偃― 蝶―）
グワ
掛。 ―撥（タハカル）
クワイ
会 （狡―）
佪 （俳―）
懐 （遣― 平―）
外 ―疏（ウトシ）
グワイ
荒 ―世和世秡（ツヽシヨロヒ）（怠―）
クワウ
喧 ―呻〔ノヽシル〕×
惶 （憧―）
遑。 （何―）
徨 （彷―）
訇。 （軒― 匂―）
クワク
廓。 （寥―）
嫿。 （姥―）
獲 （嗽―）
クワツ
活 （口―）
月 ―来（ツキコロ）
グワツ
完。 ―尓〔ニコヽ〕×
クワン
巻 ―曲（マカリソル）×
桓。 （盤―）
還 （以―）
闕 （交―）

元 ―来〔モトヨリ〕×
グワン
帰 ―歟（カヘンナム） ―去（イサハ）
クキ
亀 ―卜（カメノウラ）（謀―）
鬼 （利―）
屈 （無― 冤―）
クキツ
恐 ―喝（カレコマル・ヲヒヲヒユルナリ）×
クキヤウ
拱 ―手（テウタウタク）（垂―）
クキヨウ
喝。 （喩―）
グキヨウ
攫 （拏―）
クキヨク
月 （令―）
グエツ
輩 （轔―）
クン

【け】

仮 ―令〔タトヒ〕× 〈―使〔タトヒ〕〉× ―借（カリソメ）×
ケ
経 ―営（イトナム）×△
ケイ
項 ―之（シハラク）（俄―）
刑 ―罰（イマシム）△
勁。 ―捷（ハヤワサ）
ケイセウ
奎。 ―蹣〔フミニシル〕
景 ―行（タハシ）（メマキスカタ・ナサケ）×
厳。 （脇―）
継 （手―）

ケウ
交 ―闘（マシリカヨス）×△ ―加（チリカフ）×
憍 ―雍〔ホシマヽ〕（容―）
嬌。（含―）
ゲウ
暁 ―之裏（アカツキカケテ）
澆 ―薄〔アハツ〕△
狡。（獪―）
ケキ
隙 （伺―）
ゲキ
逆 ―旅（サラタヒ）×
ケチ
掲 ―焉（イチシルシ）×△
ケツ
結 ―斎（ツヽシミ）
潔 ―斎（イサキヨシ）×△
ケフ
拗。（拚―）
ゲフ
業。（岌―）
ケン
喰 ―喝（クチサシツトフ）×
嫌 ―疑（ウタカウ）△
遣 ―懐〔オモヒヤル〕
軒 ―渠（シタフ・シリシタヒ）×
獫 ―狡（ヒタフル）×
犬 （庄―）
見 （意― 喜―）
娟。（嬋―）
健。（聞―）
奚 （胡―）
ゲン
言 ―説〔イフナラク〕

現 （面―）
限 （無―）

【コ】

コ
故 ―故（ネタイカナ）×（故―）
胡 ―奚（ナンソ）―然〔ナンソ〕× ―為（ナンスレカ）×
固 ―護（ヒタヲモフキ）（カタヲモフキ）× ―辞（イナフ）△（禁―）
怙 ―騎（ハツマ・ハツセ）×
コロ
―捘（ソハ〳〵シ）×
觚。 ―負（ソムク）× ―疑〔ウタカウ〕
孤 ―腹（ハラタヽミウツ）×
皷 （終― 中― 不―）
古 （而― 単―）
己 （嗟―）
呼 （跋―）
扈 （王事靡―）
ゴ
鹽。 ―覧（ミソナハス）△
御 ―寐（ネテモサメテモ）△
窘 （私― 耳―）
語 （固―）
護 （嚚―）
齬。

コウ
口 ―活（ヨノワタラヒ）△
叩。 ―頭（ヌカツク）
勾。 ―引（カトフ）
拘。 ―惜（カヽヘモツ）
興 ―販（イラス）△
後 （向―）
逅 （邂―）
梗。 （生―）
酷 ―烈（カホル）×
谷 （惟―）
黒 （梨―）
コツ
忽 ―諸（イルカセンス）×△ ―亡〔ナイカシロニス〕（「―忘」とすべくんば、△） ―焉（タチマチ）△ （奄― 倏―）
ゴツ
矻 （硉―）
コン
懇 ―切〔ネンコロナリ〕△
今 （長―）
昏 （垂―）
溷 （懲―）
ゴン
媛。 （嬋―）
言 （虚― 謹― 繻― 儳― 中― 諷― 片―
名― 和―）

【さ】

サ
左 ―右（タスク）（トサマカウサマ）×△
沙 ―汰（ソヽル）×△
嗟 ―呼（アヽ）×
蹉 ―跎（フシマロク・フミニシル）×△
坐 （倚―）
ザ
髪。 （鬟―）
座 （昇―）
サイ
際 ―目（サイメ）
債。 ―泥〔ナツム〕
取 ―手（ホテ）
綵 ―織（イロキヒシ）×△
斎 ―礼（タムク）（結― 潔―）
哉。 （迦― 奢― 譽― 謨― 私― 被及給―）
細 （委―）
眦 （睚―）
猜。 （為―）
齟。 （咫―）
サウ
早 ―朝（アサマツリコト）×△ ―晩（イツカ）×△
―卒〔ニハカナリ〕
想 ―像（オモヒヤル）× ―得（オモヒエタリ）
勦。 ―説〔サカシラ〕（トリコト）×
造 ―次〔タヤスシ〕（ニハカナリ）×△ （字音語と

しては「—顚倒」と連合の形）

相争。（不—　無—）（悪—）（汝—）

曹。（斉—）

殆。（想—　仿—）

像。—憶〔ムカシ〕

昨。（東—）

作索（大—　落—）（警—）

策躊（握—）

繖。—言（クリコト）

蒋。（荏—）

儳（サン）—言〔サカシラ〕×　—和（サカシラ）×

【し】

只。—且（カクハカリ）〔シハラク〕×

支—離（シリ）（アヅシ）×　—頤（ツラツエツク）×

伺—隙（シケキ）（ヒマヲウカヽフ）△

私—語（サヽヤイコト　サヽメキコト）×　—哉（ツレナイカナヤ）

糸—惜（イトヲシ）

覯。—謾（シル）〔クハシ〕　—縷（シル）〔ツマヒラカ也〕×

之（加—　曉—裏　項—）

死（敢—　厄—）

旨（具—　大—）

此（如—　彼—）

使（正—）

差（参—）

施（日—）

歯（切—）

纒（裾—）

至（甘—）

市（和—）

悠（自—）

自（ジ）—如（タヒラカ也）△　—恣〔ホシマヽ〕△　—由（ホシマヽ）△　—然（ヲノツカラ）×△（手—　本—）

而—己（ナラクノミ）×（然—　伏手—）

尒—馨〔シカノコトシ〕　—来（ソレヨリ）×（完—　卒—　蔑—）

時—勢粧（イマヤウスカタ）×（少—）

耳—語〔サヽヤイコト　サヽメキコト〕×△

事（誓—　无—　了—　王—靡鹽）

次（造—　取—）

辞（固—）

茲。（于—）

髻。（髪―）

周（シウ）―章（サハク）（アハツサハク）×△

終―古（トコシナヘ）×　―頭（ハテツカタ）×　―宵（セウ）〔ヨモスカラ〕△

啾。―啾（セヽシ）

蹂―躙（シウリン）（フミニシル）×△

従（シキ）（甘―）

色―遅（コヽロモタナシ）

尼（シチ）。―尼（ハシタナシ）

膝―行（シツカウ）（キサル）△

嫉―妬（ネタム）△

瑟（シツ）（蕭―）

実（シツ）―為〔マメヤカニ〕

―湊（シフチフ）（ヒチメ）

儘。―蠹（テフ）〔ヒチメ〕

拾（シヤ）（収―）

執―所（ジャウ）

遮。―莫（サマアラハレ　サモアラハレ）×

者―嚮（シヤク）

捨―諸（シヤク）

斜―日（ジャウ）

闍。―蘭（ジャウ）

射―賭（ジャウ）

正―使（タトヒ）×　（端―）

生―梗（ユキ〳〵シ）×

庄―犬〔ホシマヽ〕

昌―悛（シャウヒン）（マヒロク）×　（正しくは「―披」か）

慞。―惶（シャウカ）〔アハツ〕

商―賈（シャウカ）（アキナヒ）△　―礭（ハカリサタム）×

廩。―雲〔ワサワヒ〕

請―降（カウコウ）（「カウ（を）コフ」と解すべきか）

瘴。―煙〔ワサワヒ〕

唱―（引―）

尚―誇（ジャウ）

詳。―沉（ジャウ）

章―周（ジャウ）

蹌。―踉（ジャウ）

粧。―時勢（ジャウ）

上―向（ジャウ）

上―日（ツカハス）

常―夏（トコナツ）（尋―）

情―（無―）

婥（シヤク）。―妁〔ミヤヒカ〕

藉。―令〔タトヒ〕×

妁。―婥（シヤク）―　媒―）

借―（仮―）

惜―（拘―　糸―）

嚙。（咀―）
迹（形―）
若（ジャク）―干（ソコハク）×　（譬―）
弱（起―　柔―　微―　尪―）
惹（伴―）
手（シュ）―談（テスサミ）△　―自（テツカラ）　―継（テツサ）（拱―　叢―　伏―　伏―而）
取―次〔ミタリカハシ〕×
―拾（ツムシ）×
収―中（ナカンツクニ）×
就―途（カトテ）△　（頓―）
首―猶（サカヽリ）△
酒―直（ツクロヒナヲス）
修―（具―）
趣（擁―）
腫。―党（タウヲタツ）
樹（シュク）―忽（タチマチナリ）（颯―）
焂。―与（イツレ）×　―為（ナンスレソ）
孰（シュク）―挙〔イラス〕△　（浮―　目―）
出（シュツ）―動（ムクメク）
蠢（シュン）。（礼―）
悛。（同―）
蹲。―的（コレモアレモ）△
准（ジュン）―吹（オヒカセニツキ）
順

潤―色（ツクロウ）△
所（ショ）―以（ユヘ）（コノユヘニ）×　―謂（イハユル）×
―幾〔イクハク〕―執（スマフ）×△　―難（ハヽカラル）（何―　御息―）
諸―捨（ステメヤ）　―嬬〔タヲヤカ也〕（忽―）
咀。―嚙（ショシャク）（カミハム　カミクラフ）×　〈―嚼〔カミハム　カミクラフ〕〉
沮。―洳〔ミヤヒカ〕
庶―幾（コヒネカフ）×△
且。（只―）
疏（外―）
汝（ジョ）。―等〔ナムタチ〕×　―曹（ナムタチ）×
如―然（シカノコトシ）×　―何（イカン）　―此（カクノコトシ）　―許（コシラフ）×　（自―匹―　蔑―）
洳。（沮―）
縱（ショウ）―矜〔ホシマヽ〕（放―）
鐘（竜―）
勝（不可―）
衝。（盱―）
辱（ジョク）（忝―）
心（シン）―着無（コヽロツキナシ）　―蘂（ムネサハク）（一―　寒―　小―）
真―成（マメヤカニ）×

森。
—然（イヨヽカナリ）
参　—差（シムシ）（カタヽカヒナリ）×△
進　—退（ノヘシヽム）〔フルマヒ〕（フルマフ）×△
呻。
（呀—）
（佳—）
辰　（不—　未—）
審　（地—）
震
尋　—常（ヨノツネ）×△
任　—意（ジミ）△
荏。　—苒（シムサム）〔タヲヤカ也〕×
仁　（不—）

【す】

数　—奇（サチナシ・マサリカヲナシ）（マサリカヲサシ・サチナシ）×△
垂　—昏（ヒクラシ）×　—拱（スイクキヨウ）（タウタク）×△
誰。　—何（カレハタソ）（タソ）×
雎　—盱（スイク）（ミハル）（メミハル）×△
錐　—徹（キリトヲシ）
吹　（順—）
砕　（細—）
頽　（顛—）
随　—分（恐らくは「ナフサ〳〵」もしくは「ナツサ〳〵」）×
蔬　（蔵—）
薬。　（心—）
宿　（憶—）

【せ】

世　（荒—和—秡）
是　（於—）
清　—澄（イサキヨシ）　—朗〔ホカラカ〕
誓　—事（チカコト）〈—言〔チカコト〕〉△
声　—華（ハナヤカナリ　ハナヤカニ）×
細　—砕（セイスイ）（クタヽミル）×△（もと「クタクタシ」「クタク（ル）」などありしか）
鬣。　—髪（カミユヒタツ）×
成　（真—　長—）
生　（穐—）
勢　（時—粧）
小　—丈（ヒキシ）　—選（シハラク）　—心（コヽロホソシ）
少　—間（スコシバカリ）△　—時〔シハラク〕（シハシハカリ）（屑—　多—）
肖　—与（アエモノ）（不—）
消　—息（アリサマ）×△

鈔。—喜（コノム）
紹—介（ナカタチ）×（たゞし「—芥」）△
顯—額（カシケタリ）×△
蕭—条（カスカナリ）×＜—索（カスカナリ）＞×△
—瑟（カスカナリ）×
（可—）
（終—）
咲—寞（サウサシ）△
霄（可—）
（狼—）
（禮—）
惜—歯（ハヨクヒシハル）（懇—）
藉—耻（ハチヲキヨム）
褐。—少（イサヽカ）（繁—）
切—折（ヨオリ）（无—）
雪（節—）
屑（勿—　念—）
節（言—　勦—）
折（愛—）
殺（断—）
説（勁—）
藝—廐（ソハム）
絶—襪（シタラカナリ）
捷。—娟（タヲヤカ也）（タワム・ナマメク）×
睫。—媛（タヲヤカ也・タワム）×
（徒—）
（小—）
（荷—　向—）
跣—而（シカシトモ）×（胡—　自—　如—　森
選—輾—　徒—　怳—）
前
然

【そ】

疎—遠（ウトシ）△　—躰（ナメシ）
阻。—難（ウチハヤシ）（難—）
穐。—生（ヨミカヘル）△
初（当—）
鎔。—硐（スカシトス）×
嗽。—獲（ハヲトヽキ）×
蹭。—躑（フシマロフ）×
惣。—暗（ツヽクラナリ）
藪（斗—）
僧（可—）
足—恭（ネコウヤ）（「スク」とみとむべきか）×
色（好—　潤—）
喞（啾—）
息（御—所　消—）
速（急—）

蹇（偃―）
〈側―匿〉
卒（ソツ）―尒〔アカラサマ〕（ニハカナリ）（ユクリナシ）×△
蹲（ソン）。―踞（ウクリマル）（ママ）×―踏（シリウキタナシ）×
（たゞし、名義抄は「―喈」）

【た】

他（タ）―魔（アタニナス）（任―）
多―少〔イクハク〕（タクヰヨク）×△（幾―）
―攫（ヒコツラフ）△
挙―汰（沙―）
（嚔―）
咤。（嗟―）
跎（婀―　褒―）
娜（タイ）大―底〔オホムネ〕×△―索（アサリ・アサル）
―概（オホムネ）×△―旨〔オホムネ〕（オホヨソ）△―都〔オホムネ〕（オホヨソ）×△
怠―荒（スサヒ）×
―芥（アクタハカリ）×
（哈―）
嘘。
（進―）
退
（可―）
耐。

躰（疎―　為―）
胎。（禍―）
（駑―）
駘（霰―）
鼕（擁―）
滞（鬚―）
（無―）
鼕。
乃。
唐（ダイ）―捐（ムナシ）×△（もと「指」と見ゆるを訂す）
当―頭（ツヽメク）―初（ソノカミ）
宕―（浮―）
倒（潦―）
党（樹―）
（聞―）
嘗。
卓。―犖〔コエスクル〕（スクタリ）×
逞。―躒（コエスクル）×
嚔。―咤（サシクム）×
踏（タフ）（蹲―）
淡（タシ）―薄〔アハツ〕△
単―己〔スルツム・スルスミ〕×△
端―仰（ヒタヲモムキ）×―正（キラ〳〵）△（無―）
―溷（タンコン）（ワツラハシ）
―弥（タシヒ）（ウツカツキ）（ママ）×△
誕

〈輾 ─然（ニコヽ・ニコヽンス）〉×
赧。 ─面（オモテヲアカム）×　（もと「赦」とあるを訂す）
襢 ─裼（カタヌリ・タンセキ）×
儋（手─）
談（恬─）
断《ダン》 ─絶（スクレタリ）
煖。 ─煥（コヽロシラフ）

【ち】

踟《チ》 ─躕〔タチモトホル〕×△
地 ─忍（タヘネムセム）△　─動〔ナヰフル〕　─震〔ナヰフル〕×△（白─）
陁（陂─）
遅（色─）
癡（白─）
知（不─）
耻（雪─）
緻（絲─）
怩《ヂ》（忸─）
中《チウ》 ─古〔ナカコロ〕△　─言（ナカコト）（可─　就─　沈─）
躕 ─躇〔タチモトヲル〕（タチヤスラフ）（踟─）
〈躊。 ─躇〔タチモトヲル〕（タチヤスラフ）〉×
直《ヂキ》（修─）
忸《ヂク》 ─怩《チクヂ》（カヲアカム）△
讋。《チフ》（傴─）
滯。（潗─）
長《チヤウ》 ─今（イヤメツラナリ）　─閑（ノトカ（ママ）リ）　─成（ヒト、ナル）×
聴（匆─）
丈《ヂヤウ》（小─）
着《チヤク》（心─無）
佇《チヨ》（延─）
躇。（躕─）
除《ヂヨ》 ─非（ヲク）
澄。《チヨウ》（清─）
重（鄭─）
直《チヨク》 ─物（ナヲシモノ）
亍。（彳─）
沉《チン》 ─詳（オタヒカナリ）　─中（ナカコロ）×
塵（煙─）

【つ】

通《ツウ》 ─夜〔ヨモスカラ〕×△
迍。《ツキン》 ─邅《ツキンテン》（ウチハヤシ）×

【て】

ティ
丁 ―寧（ネンコロナリ）×△
停 ―僮（マトヤカ也）×
鄭 ―重〔ネンコロナリ〕△
滯。 ―滌（アサハヤカ）×
底 （緑― 大―）
ディ
泥 （債―）
テウ
寵 ―愛（ウツクシミ）△
綢。 ―繆（テウヒウ）（マシハル・マツハル）×
窕 （窈―）
調 （気―）
朝 （早―）
窕。 （窈―）
デウ
条 （蕭―）
嫋。 （諸―）
テキチョク
彳。 ―亍（タヽスム）×
テキ
的 （准―）
テツ
惙。 （綿―）
綴 （補―）
徹。 （錐―）
テフ
蝶。 ―臥（ヒレフス）×
諜。 （間―）
テン
点 ―額〔ウナツク〕×（遥―）
遭。 ―蘰〔ウチハヤシ〕（迺―）
恬。 ―憺〔オタヒカナリ〕
輾。 ―然（ニコヽ・ニコヽンス）×
忝。 ―辱（ハツカシ）
貼。 （嫌―）

【と】

ト
徒 ―然（ツレ〳〵）×△ ―跣（トセン）（ハタシ）（カチアルキ）×△ 〈―歩〔カチアルキ〕〉
賭。 ―弓（ノリユミ）× ―射（ノリユミ）×
斗 ―藪（ウチハラフ）△ ―頓（ニハカナリ）
途 （首―）
都 （閑― 大―）
妬 （嫉―）
堵 （阿―）
駑 ―駘（トタイ）（ニブシ）×△
トウ
東 ―作（ナリハヒ）△
等 ―閑（トオサナシ）（ナヲサリ・ナヲサリカテラ）×△ （汝―）
氈。 ―氉（トウマ）（フクタム）×
同 ―瞬（アツヽカフ）×
硐。 （鎔―）
僮 （停―）

動（挙―　蠢―　地―）
頭（裏―　叩―　終―　当―）
躑。（躊―）
トク 得（想―）
〈匿。（側―）〉
トン 頓―首〔ヌカツク〕△　（斗―）
敦。―養〔アツカフ〕
ドン 鈍―魯（ニフシ）（もと「純魯」とありしを訂す）

【な】

ナ 奈。―何〔イカン〕（其―　不―）
ナン 難―堪（タヘカタシ）△　―阻（ナツム）（所―阻―）
難。（遭―）

【に】

ニ 二（一―）
ニウ 柔―弱（ヤハラナリ）△
ニチ 日―施〔ヒクタチ〕×　―斜（ヒクタチ）×　（上―）
ニン 任―他〔サマアラハレ〕〔サモアラハレ〕
忍（地―）

【ね】

ネイ 寧（丁―）
ネウ 繞（繚―）
ネツ 熱（煖―　念―）
ネン 念―殺（オモヒコロス）　―熱（アツカフ）×

【の】

ノ 儂（余―）（もと「濃」の如くありしを訂す）

【は】

ハ 破（驚―）
バ 馬（白―）
ハイ 俳―佪〔タチモトヲル〕（タヽスム）×△　―優（タハフレ）△
―却（ヨヒヤカス）△
―苑〔イサム〕〔アグナフ〕×△
―眼〔アカラメ〕×
―妁〔ナカタチ〕
―違（カタヽカヘ）
―魄（ムラカル）
―像〔ホノカナリ〕×
バイ 排―沛
売―媒
ハウ 方―旁。
彷。

彷　—徨〔タチモトヨル〕（タ、スム）×△　＜—彿

放　〔ホノカナリ〕＞×
—縱（ホシキマヽ）△
髣（ホノカナリ）△×
匊（ノヽシル）
—匊〔ノヽシル〕
—隱（トヽメリ）×
軒。
榜　（轙—）
—滿（ハウマン）＞△
＜飽
怲　—然（ホル）△
亡　（忽—）
貝　（容—）
白　—癡（シレモノ）△　＜—物〔シレモノ〕＞　—眼（ソメニミル）〔ニラム〕×　—地（アカラサマ）×△　—馬（アオウマ）△
—来（セメキタル）△
迫
魄　（旁—　落—）
薄　（澆—　淡—）
寞　（寂—）
縛　（面—）
発　—趣（カヨル）（ニホフ）×△
慰。
撥　（廻—）
髮　（理—）

【ひ】

跋　—扈（フムハタカル）△
罰　（刑—）
秡　（荒世和世—）
半　—漢（イサム）×△　—面（ハタカクル）×
伴　—惹〔サソフ〕△
班　—給〔イラス〕△
盤　—桓（タチモトヨル）　—紆（ヨソノホル）×
晩　（早—）

彼。
陂。
被　—此（カレコレ）
譬　—陂（カタクツレ）×
罪。　—及給哉（可—分給）
髮。　—若（タトヒ）×　＜—如（タトヒ）＞×
非　—微（タシナミ）×　（たゞし「—霰」）
斐。　—髣（タチカミカラス）×
鼻　（除—）
最　（甲—无）
美　（髣—）
微　—肩（チカラヲコシ）×△
—爛〔タヲヤカ也〕
—弱（ヨハシ）△　—譏〔イクハク〕（可—力罪—）

備（弁―）
靡。（王事―盬 迤―）
篠（仮― 窘―）
弥（誕―）
繆（綱―）
匹（―如（スルツム・スルスミ）× ―文（ママ）（イヤシ）
（正しくは「―夫」か、しかりとせば△）
―矜（イカリフツクル）×
氷。（跡―）
跰。（伶―）
傳。（―紛（マカフ）×△
〈顧。（―頑（ヒンカン）〔マロク〕▽
品（岸―）
恢。（昌―）（正しくは「披」か）

【ふ】

不（―可勝（エカタシ） ―向〔ナントモセス〕
―古（トコメツラナリ） ―相（テウタウセス）
―審（イフカシ）×△ ―仁（アシタヽス）× ―
肖（オサナシ）△ ―知（イサ・イサシラス）×△
―奈（ナントモセス）× ―分（ネタイカナ）×
―用〔アチキナシ〕△ ―了〔オサナシ〕×△
浮（―宕（アクカル・ウカレタリ）△ ―出（ホノメ

風（キイツ）
―流（タハル）×△ ―聞（ホノキ□）△
負（孤―）
諷（―言（ソヘコト）
撫（―育〔ナツカシ〕
―仮（フクイトヲ）（ママ）（無―）
伏（―手（ツマサク）× ―手而（ツマサク・トリテ）
馥。（―焉（フクエン・アハツ）
腹（皷―）
分（可被―給 随― 不―）
紛（―纈―）
文（疋―）（正しくは「夫」か）

【へ】

平（―懐（ナメシ）×△
―狡（ヘウカウ）（トキモノ）×
―眇（ホノカナリ）
漂。（―悠（イコメク）
飄。（―瞟―）
眇（―屑（ヘツセツ）（シタラカ）
―様（コトナウ）（ママ）（了―）
―尒〔ナイカシロ〕×△ ―如（ナイカシロニス）×△
別（
蔑（

ヘン 片言（カタコト）△
販 （興―）
辺 （両―）
ベン 弁 ―備（ト、ノフ）△

【ほ】

ボ 暴 ―諱（シヒタハフル）
墓。 （无―）
ホウ 蓬 ―累（カシラカ、フ）△
ボウ 謀 ―亀（カメノウラ）
ホク 北 ―轅（ヒカム）×
ボク 木 ―強（キコハシ・キシクナリ）×△
ト （亀―）
ボン 本 ―縁（コトノモト）　―自（モトヨリ）

【ま】

マ 魔 （他―）
マウ 孟 ―浪（アラシ）×
猛 （威―）
マク 莫 （遮―）
マン 蔓 ―莚（ハヒコル）×
△満 （飽―）▽

【み】

ミ 未 ―審〔イフカシ〕×
ミヤウ 名 ―言（ヨト）　―謁（ナタイメン）

【む】

ム 无 ―事〔ツレ〳〵〕〔アチキナシ〕×　―節〔ナメシ〕　―墓（ハカナシ）×　―由（ヨシナシ）
―聊（ヤスキコトナシ）（甲斐―）
―屈（ナヨチソ）　―服〔ウキカウフリス〕
無 ―端〔アチキナシ〕（ス、ロニ）×　―限（ソコハク）×　―情（ナサケナシ）×　―相（マサリカホナシ）　―乃（ムシロ）×　―為（アチキナシ）×△　（心著―）
務 （秋―）

【め】

メウ 妙 （雅―）
メン 面 ―現（ヒタヨモテ）　―縛（シヘテニシハラル）△　―目（オモテヨコス）×△　（赦―　半―）
綿 ―惙（カツ、ン）△

【も】

蒙（モウ）
—籠（モウロウ）（ヲクラシ）（響—）
朦（朧—）
氈。（氈—）

目（モク）
—出（メテタシ）（際—　面—）
勿（モツ）
—聴（ナユルシソ）　—殺（ナコロシソ）　—
軽（ナアナツリソ）
（直—）

物（モン）
—健〔タメラフ〕×　—嘗（イフナラク）×（たゞし「—道」）（風—）

【や】

夜（ヤ）
（竟—　通—）

様（ヤウ）
（別—）

養
（敦—）

厄（ヤク）
—死〔ワサワヒ〕

約
—略（スコシハカリ）×

【ゆ】

由（ユ）
—来〔モトヨリ〕×△

猶
—悠（ユイウ）（ヌルシ）△　〈—豫（タメラフ）〉

闕。
（闕—）

惟（ユイ）
—谷（コレキハマル）

【よ】

余。（ヨ）
—儂（ワレラ）

与
（孰—　肖—　容—）

預
（給—）

猶
（豫—）

（帰—）

欺。
—堪〔イサム〕

勇（ヨウ）
—憍〔ホシマヽ〕　—易（タヤスシ）×　—奮（ヨウエイ）〔ウナル〕　—貞（カホハセ）（オヘラヒ）×△　—与（ウナル）×　（阿—）

容
（不—）
（憍—）

用
（不—）

雍
（憍—）

【ら】

羅（ラ）
—縷〔ツマヒラカ也〕×
（嘍—）

嚱。
—離（ヨリノク）

頼（ライ）
（由—　以—　向—　去—　今—　元—　月—
尒—　迫—）

来

ラウ
礼（斎―）
浡。―浪（サナゲトル）
窄―籠（タチロウ）△
潦。―倒（ホヽク・ホヽケタリ）×
狼。―杭（ハラアシ）×　―藉（ミタリカハシ）
踉。―蹌（タメラフ）
浪（孟―　浡―　流―）
ラク
落―魄（オチフル）×　―索（クツ）（零―）
駱。―駅（ユキヽタル）
躒（逵―）
犖。（卓―）
ラン
蘭―闍（アナタムト・アナユカシ）×　（名義抄は「簡」にあやまる）
覧（御―）
纜（解―）

【り】

リ
利―鬼（イラヽク）
理―髪（カヽケ）△
梨―黒（ツシミクロン）
離（支―　頼―　陸―）
リウ
慄。―慄（ワヒシ）
流（風―）

リク
鰡（鮛―）
陸―離〔カタヽカヒナリ〕
リツ
慄（慄―）
リヤウ
良―久（ヤヽヒサシ）×△
両―辺（コナタアナタ・コカタアカタ）×（騎―）
量（器―）
リヤク
略（簡―　約―）
轢（浚―）
リヨ
旅（逆―）
リヨウ
竜―鐘（オソロシ）（シナケル・タシナシ）（タシナム）×
リン
輪―囷（マカレリ）
轔。―轄（マカル）
躪（蹂―）

【る】

ル
留―連〔タチモトヨル〕×△
流―浪〔サスラフ〕×△
縷。（靚―　羅―）
ルイ
謰。（靚―）
累（蓬―）

【れ】

レイ 令 ―月〔ヨキトキ〕△ （仮― 藉―）

伶。 ―蹂（サスラフ）× ＜―仃（ティ）〔サスラフ〕＞×

跉。 ―蹂〔サスラフ〕

零 ―落（オチフル）△

礼 ―悛（ウヤマフ）

儷 （伉―）

麗 （美―）

怜。 （可―）

レウ 了 ―事（オサ〳〵） ―別（ミサヲ也）△ （幹―不―）

浚 ―轢（シヘタク）△

嶚。 ―喇（レウレツ）（アヒモトホル）

潦。 ―倒〔オチフル〕×

繚。 ―繞（マツハル）×

寥 ―廓（レウクワク）（ホカラカ）

（无―）

レツ 聊。 （酷―）

烈。 （嶚―）

喇。 （酒―）

レフ 獠 ―貼（ミトロメカス）× （たゞし、名義抄は、「瞻―」）

レン 賺。

連 （留―）

【ろ】

ロ 嘍。 ―囉（スカナシ）×

賂 （賄―）

捼。 （觚―）

魯 （純―）（「鈍魯」ならむ）

ロウ 捿。 ―拗〔テスサミ〕

蠬。 ―朦〔ヨクラシ〕

籠 （蒙― 窄―）

ロク 碌。 ―矶（マロク）

力 （可微―）

【わ】

ワ 和 ―言（ヤマトコトハ） ―市（アマナフ・アマナヒカフ）×△ （荒世―世秡 儵―）

ワイ 賄 ―賂（マヒナヒ）△

ワウ 王 ―事靡盬（ワウシモロイコトナシ）

匡 ―弱（チカラナシ）△

往 （以― 既―）

【ゐ】

キ 為 ―猜（ソネマル・ソネマレナマシ） ―躰（テ

イタラク）（以— 何— 胡— 実— 孰—
無—）
尉。—眼（アカラメ）
委 —迤〔タヨヤカ也〕 —曲（コケヒク△×） —
細（クハシ）△
威 —儀（カシツク）△ —猛（イカメシ）△
蔵。—蹉〔シナフ〕×
逶 —迤（ヨロホウ（ナカシ・ナコヤカナリ）×△
—匜（サヽヤカナリ）
（方—）
違（キヨウ） —滯（キヨウタイ）（トヽコホル）△
擁 —腫（ソリマカル）×

【え】

営（エイ） （経—）
越（エツ） （発—）
冤（エン） —屈（クルシフ） （經—）
遠 （疎—）
轅。（北—）

【を】

憶（ヨク） —宿（ムカシ） （昨—）

【未詳】

辺 —哉（カタハラクルシキカナ）
金 —哉（ツライカナヤ）

以上の表から帰納できることは、多々あるのであるが、ここでは、語彙論的見地へ立入らずに、先づ用字の種類について考へてみよう。

上位字の種類は、約四百八十字。下位字の種類は、四百八十一字。上位・下位両様に出現する字の種類（即ち右の四百八十字、四百八十一字に共通する字の種類）は、七十九字にとどまる。従つて、上位字・下位字を包括して考へた場合の異なり字の数は、八百八十二字である。これらは、語数の約六百八十二語を賄ふものである。語はすべて二字から成るものではないから、一字あたりの語負担の数値を、ここで正確に計算することはできないが、一字があまり頻繁に語を表記するに用ゐられたといふことができない感がある。右のうちで、一字で比較的多くの語構成に参与したものといへば、

6以 —降 —還 —来 —為（何— 所— 所—）
5焉 （於— 何— 揭— 忽— 馥—）
9可 —咲 —惜 —憎 —耐 —中 —被分給 —微力
—怜（不—勝）
15何 —以 —因 —焉 —況 —違 —所 —由 —為
—為（云— 於— 幾— 如— 誰— 奈—）
5閑 —雅 —都（偷— 長— 等—）

4眼（詰―売―白―尉―）
5幾―多―何―許（所―庶―）
4向―後―前―上―来
5忽―諸―亡―焉（奄―倏―）
9言（虚―謹―繆―儳―中―諷―片―名―和―）
6哉（辺―奎―戇―讟―私―被及給―）
6自―如―恣―由―然（手―本―）
5尒―馨―来（完―卒―蔑―）
7手―談―自―継（拱―寂―伏―伏―而）
8所―以―以―謂―幾―執―難（何―御息―）
7如―然―何―此―許（自―匹―蔑―）
5心―着無―蘖（一―寒―小―）
8然―而（胡―自―如―森―輾―徒―惘―）
5大―底―索―概―旨―都
5中―古―言（可―就―沉―）
5徒―然―跣―跣―歩（首―）
6白―癡―物―眼―眼―地―馬
12不―可勝―向―古―相―審―仁―肖―知―奈―分―用―了
7无―事―事―節―墓―由―聊（甲斐―）
―屈―服―端―端―限―情―相―乃
7容―慵―易―裔―貞―貞―与（阿―）
9来（由―以―向―去―今―元―月―尒―迫―）
4和―言―市（荒世―世秡）儳―）
8為―猜―躰（以―何―胡―実―孰―無―）

さて右の如く見て来て、これらの訓読語がすべて、いはゆる畳字の語であるかといふと、かなり、うちかたぶかれるところがある。

たとへば出現度の高い「可」の字の下に見出される

a、可被分給

や

b、可咲　可惜　可憎　可耐　可中　可怜

などが、すべて音読の部には見えないのみか、aの方は、明らかに文法的にいへば語の単位より大きな、句に相当する。或は長い一文節といふのに相当する。「可被分哉」は、すでに「乞詞」といふ注によつても了解できる如く書中において無心をする時のことばであり、「被及給哉」などとともに、本書の成立した当代前後の書札に見える、殆んど定型をなす措辞である。（たとへば高山寺古往来に「被及給者最所望也」「被上及者最所望也」）これらを、畳字の門の中に取り込んで排列し、長畳字といふ範疇で、考へたのは編者にとつて、正しくそれが、書簡における定型のいひ方として、客体化され、一単位とみなしえたからに外ならない。音読の部に

入れられてゐた「妖不勝徳」の如きも書簡用語に歯ひするものといつてよいであらう。

この句はもともと史記の殷本紀の中に見えるから、出典のある句として文学的表現、もしくは金句・格言の類には違ひないが、雲州消息などにも登場するものである。たゞし書簡用語といふ規定のしかたは、極めて漠としてゐる。同じ雲州消息（四月）に見える「全身奉公（是臣之忠也）」の如きが、平家物語巻第一「殿上闇討」の「せむずる所、身を全して君に仕ふ」にも出現するところを見ると、書簡用語といふことで、すべてを括つてしまふことは粗大にすぎるであらう。しかし、本書が、畳字門などにおいてとくに日常書簡用語をふくむとはいひ乍ら、その書簡用語が、当代の文学の表現――ことに、和漢混淆的な文章の表現と共通の基盤に根ざしてゐることを証するといふ点では、粗大な視点は、むしろ有用なものといふべきかも知れない。狭義の、書簡用語としては、後にもふれる拙稿にのべたやうに、読み手（つまり宛名人）に対する待遇を籠めた語であり、会釈の語に限るべきであるが、拡大した意義では、一般の和漢混淆的文学表現と相重なるといふことが適切である。

ここにいふ和漢混淆的文学表現の用語を多くふくむといふ事実の証明は、ここでは敢て省くが、方法としてはすでに十分な見通しが立つし、且つ十分に可能であると信じられる。さて、右に引いた「妖不勝徳」から「可被分哉」「被及給哉」などを掩ふ領域は、一つの極端を示すものであるが、これらよりも縮小なもので、たとへば「可」「不」を上位字としてふくむ畳字も、漢字表記を常道とする文章の中においてこそはじめて、一単位として把握せらるべきものであつて、その訓読形の独立は、その用字の裏打ちを欠いてはむろん成立せず、畳字などといへるものではない。たとへば「不可勝（エカタジ）」の如き三字連結は、音読語に見える、

不可悦　不可思議

と全く同じ基盤に立つてゐる筈であるにかかはらず、本書としては訓読にのみ見える。

ここに、畳字門の語の、字音語と訓読語との関連を改めて考へなければならない段階に到達した。前の表は△印を付けたものが、音読・訓読両方に重出する語である。これが、一八〇語以上あるが、このうちで、旧稿（本誌第三号所載）にもすでに報告したやうに、約七〇語は、本書の本文中に、音読語の位置で、訓読をすでに伴つてゐるのである。これらは音読としても、訓読としても比較的普通のものとして用ゐられたものと想像すべきものであり、その用ゐられた範囲は、漢文訓読に培はれた用字を通常とする領域においてであつたと思はれる。筆者の別の小稿に於て、高山寺本古往来の音読の畳字と、本書のそれとの比較を試み、数値的に正確には示さなかつたが、本書の畳字が、当時の書簡用語といふ性格をもつことを暗示することができた。今後もこの種の比較を重ねるにしたがつて、その事実を一層裏付けてゆくことが可能になるものと予測できる。また別の稿（「山田孝雄追憶史学

語学論集」所版「色葉字類抄の字畳門の語の注「一詞」の意義」）で序説的にのべたやうに、同じく書簡用語的な性格を用語の構造にまで立入りつつ詳細に調査すれば、一層具体的に、これらの畳字の性格は明らかにならう。このやうな方法による研究も、筆者は今後近い機会に試みる予定であるから、ここには一切省くことにする。それは本誌のこの稿としては紙幅もゆるさないのみならず、多岐にわたりすぎるからである。